

# 農村コミュニティエリートの

## 権力構造

陳 光 金

### はじめに



改革開放以来、中国の農村コミュニティは権力構造の面で大きく変化したが、その重要な変化の一つは、コミュニティエリートの構成モデルが、改革開放以前の政治エリート単独の構成から、多くの類型のエリートが相次いで生じ、同時に共存するものに次第に変わったことである。これに伴い、鄉村コミュニティの各種の資源と権力の配置にも変化が生じた。周知のように、改革前の中国の農村コミュニティには一種のエリートしか存在しなかった。このエリートとは、すなわち大隊幹部のことで（黨員と生産隊幹部は実際には一群の准エリートあるいは亜エリートでしか

い）、これを政治エリートあるいは権力エリートと称する。彼らには、研究者達が過大評価してきた権限があり、それにはコミュニティの生産の組織や指揮、コミュニティの福利と収入の分配等が含まれる。このような政治エリート単独の構成形態は、農村で農家生産諸責任制が実施された後、ほどなくして崩壊した。局部的な市場化改革は、国に、一部の資源に対する再分配の権限を移管、譲渡させたが、その結果、政治エリートではないが特殊な優位にあるさまざまなコミュニティメンバーが表舞台に登場し、新しいタイプのコミュニティエリートとなった。国家権力が鄉村からわずかに撤退した後、政治権力が有効に管理あるいは支配できない社会生活空間が一部生じたことに伴い、さらに一群の人々が、自己のこの面における種の優勢を利用

して台頭し、コミュニティの社会生活に大小さまざまな影響を及ぼしている。こうして、郷村コミュニティに、新しいエリート<sup>(3)</sup>の構成形態が出現した。それは、大まかに三種のエリート、すなわち経済エリート、政治エリートと社会エリートから構成されるが、彼らはそれぞれコミュニティ生活のしかるべき領域において、全局面を左右する程の影響力を及ぼしている。

学術界の大半の意見は次のようなものである。この過程は、村落の党政幹部の再分配の権限の収縮過程であり、この収縮の本質的な意味は、郷村コミュニティの政権組織が、部分的に、公共資源に対する独占権と分配権を失い、その失った部分が農民の手中に収まったことである。制度改革は一種の小口の博打となった。しかし、まさに一部の学者が指摘しているように、これは決して個々の村落の必然的な運命ではない。O<sup>(4)</sup>は一部の村落における集団的権力の強化を見出した。W<sup>(5)</sup>は政治体制改革が追求した政経分離が、多くの村で決して成功せず、村レベルの党政幹部が依然として一切を支配していることを発見した。李守経等も次のように指摘している。『村では大きい事であれ小さい事であれ、支部書記の一言で決まる』という例の状況が、農村の一部の地域でなおかなり普遍的に存在する<sup>(6)</sup>。なるほど、これらの「発見」はすべて、村落政治の権力分配のある一面における現実の特徴を反映しているが、実のところ、

ろ、政治エリートの権力の大小と権力の出所との関係がいまだに明らかに becoming おらず、村落コミュニティの発展過程と村落コミュニティの権力分配との関係も明らかに becoming ない<sup>(7)</sup>。

事の真相は次のようなものに見受けられる。改革の過程で、農民が、自身の人的資本に対する所有権や一部の公共资源に対する使用権を徐々に持つようになり、市場空間が少しずつではあるが次第に広げられるという過程において、新機軸を打ち出そうと励んだ結果、旧体制の割当ての下で生産・再生産可能であった程度を遥かに超える経済力を作り出した。党政幹部が失った再分配の権限は、農民の手に入りさらに多くの生産をもたらしたわけである。これは、改革が成功を収めたことを客観的に示すものであると共に、農民も、そのおかげで個々人が、政治構造の面でもこれまでより自由で独立し、またコミュニティ生活の面でもこれまでもより自由に、独立してさまざまな領域の活動に参加することができるようになった。

コミュニティの社会活動領域の分割と農民の独立した参加能力の増大は、各領域において傑出した人物が生まれる微視的な基礎である。はじめに独立したのが経済活動領域である。この領域において比較的優勢な資本を持つ農民の中に、次第に（一部の地域では急速に）新しい富裕層が生まれた<sup>(8)</sup>。彼らはこうしてコミュニティの経済エリートにな

り、その行為はコミュニティの経済状況を変えただけでなく、コミュニティの経済、社会や権力の分層構造をも変えた。

社会生活もまた同時に農民自身によって組織されはじめたが、それは村落の党政幹部の制度化した権限の収縮が経済面に生じたばかりでなく、社会面にも生じたからである。<sup>⑧</sup>しかし、社会生活の組織化は決して完全に経済活動の市場原理に基づいて進められたのではなく、より複雑より微妙に変化したのであり、そのうち最も主要な傾向は、一部の伝統的な社会生活を組織する機能の復活である。<sup>⑨</sup>この背景の下、コミュニティの社会生活の領域も次第に比較的確立したものとなり、政治権力の収縮によってもたらされた空白を埋めた。コミュニティの社会生活に影響を及ぼしたり、社会生活を組織したりするのに特に適した人的資本あるいは社会資本（経済資本を持つとは限らない）の優勢を持つコミュニティメンバーは、この領域で腕をふるい、自己の社会的地位を高めはじめた。ここにおいて、彼らはコミュニティの社会エリートとなった。

政治権力の収縮は決してその萎縮を意味するものではなく、単にそれが本来の位置に後退しはじめていることを意味する。それは、本来あるべき活動領域において、収縮することもあり、強化されることもある。とりわけコミュニティにおける他のメンバー（例えば経済エリート）がコミュニティの政治生活に注意を払いはじめた時、強化される可

能性がさらに高い。例えば、一部の村落では、村幹部が村の集団経済を発展させる面において絶対的な成功を収めた時、その権力は極めて大きく強化される。<sup>⑩</sup>しかるに、他の一部の村落では、他の類型のエリートとりわけ経済エリートの勃興に伴い、同時にまた村民の自治度の高まりと直接選挙制の始まりに伴い、本来の意味における独立した政治活動空間が生まれはじめ、各種の利益集団が村の範囲内で政治権力を獲得するために競争しはじめ、競争の中で勝利を収めたコミュニティメンバーが村落政治の最上層に登った。当然ながら、次のことを見落とすわけにはいかない。

独立した村落政治はまだ立ち上がったばかりであり、その上、国家権力は依然として村落政治に強い影響、制約あるいは支配を及ぼしているのである。我々には、このような支配の構造が完全に解消されるとは想像すらできない。

一九九六年一〇月から一九九七年三月にかけて、私は、湖南と河北両省の四県一四行政村を实地調査したが、その調査で重要なことの一つに、改革開放以来の中国農村におけるコミュニティエリートの権力分配と村落（行政村）の権力構造（エリート面における）がある。今回、实地に調査したことにより、上に述べた理論分析に対し有力な実証が得られた。本稿はこの研究成果をかいつまんて述べるものである。

## 農村コミュニティエリートの類型と特徴

先に述べた通り、現代中国の多くの農村コミュニティには既に多くの類型のエリートが共存する形態が出現しているが、それらは大まかに経済エリート、政治エリート、社会エリートという三種の類型に分類できる。彼らはいずれも一つあるはいくつかの面で「資本の優勢」を持ち、そのうえ発展過程において、自己の「資本の優勢」を蓄積、更新、拡張することに長けたコミュニティメンバーである。ここで簡単に各類型のコミュニティエリートの基本的な特徴を述べておきたい。

### 郷村「企業家」——一つの實力集団

一つのコミュニティの経済エリートは、正確に言えば、二種類の人間から構成される。一種はコミュニティ内で大きな成功を収めた私営企業家であり、もう一種は能力があり、集団経済の発展のために奮闘し手柄を立てたと公認される集団企業の創始者や経営者である。この二種の経済エリートをまとめて企業家集団と呼んでおく。実地調査により、郷村企業家集団には次のようないくつかの特徴があることが明らかになった。

経営規模とコミュニティの経済発展レベル、さらにコミュニ

ニティの他のメンバーの評価に基づくものであるが、一四村落には総計一二八名の「企業家」があり、平均して一村に約九名で、一四村の総人口の〇・四二%を占める。この一二八名の人口特徴は、性別構成から言えば、女性が極めて少なく、わずかに二名の女性が、村落コミュニティ幹部と一般のコミュニティメンバーから見て「やり手」の部類に属しており、一・六%を占めるだけである。このことは、女性性が郷村コミュニティで身を起こすのになお一定の困難が伴うことを表わしている。年齢構成から見れば、一二八名のうち、二五—二九歳の者は一〇名で七八%、三〇—三四歳の者は二三名で一八・〇%、三五—三九歳の者と四〇—四四歳の者は共に三三名で二五・八%、四五—四九歳の者は一四名で一〇・九%、五〇歳以上の者は一五名で一・七%を占める。これで分かるように、「企業家」達の年齢は、三五—四〇歳と四〇—四五歳との二つの年齢帯に比較的集中しており、両者合わせて五一・六%である。学歴構成を見ると、二六名が小卒で二〇・三%、五九名が中卒で四六・一%、その他の四三名は高卒もしくはそれ以上で三三・六%である。彼らの学歴は、中卒が主で、高卒もしくはそれ以上がそれに続いている。そして、小卒は主に高年齢グループ、すなわち四五歳以上の「企業家」集団に集中し、四五歳以下の「企業家」では五名だけが小卒である。

一二八名の「企業家」の職業面における特徴は、業種分

類から見れば、工業生産に従事している者が七八名で六〇・九%、商業経営に従事している者が三四名で二六・六%、一定規模の運輸業主が六名で四・七%、一定規模の農牧漁業企業家が八名で六・二%、建築業企業家が二名で一・六%である。彼らの経営する企業の所有制の性質から見ると、一二八名中、集団企業の工場長、經理は四三名で三三・六%、集団企業の請負経営者は七名で五・五%、村で集団と個人が共同経営している企業の責任者（個人を代表）は一名で〇・八%、私営「企業家」は七七名で六〇・二%である。

最後に、一二八名の郷村「企業家」の政治的身分は、中共黨員が四六名で三五・九%、非黨員が八二名で六四・一%である。絶対数から見れば、黨員の人数は非黨員より少なく、黨員の身分が市場化の構造転換の過程において劣勢にあることを示しているかに見えるが、一四村の労働力中に黨員の占める比率が五%に満たないことを考慮すると、中共黨員の身分を持つ者は市場化の構造転換の過程において劣勢な立場にあると見る観点は成立し難い。さらに、企業の性質から見ると、七七名の私営「企業家」中、中共黨員は一四名で一八・二%を占め、その中には前任もしくは現職の村幹部七名がいる。

経済エリートは、ちょうどその数を増やしつつあり、地位的にまだ安定していないと言わなければならない。とりわけ私営企業家はなおさらである。彼らは既に、自分達が経済的

に成功したことで否応なしに国と社会から、法律を通してある種の法的な地位を得ているが、局部的な市場化改革と二つの体制の並存により、日々心の休まることがない。一方では、彼らが、資本蓄積の極初期的な段階で、少しでたらしめなことをしたこともあって、社会は彼らに充分な信頼が持てない。彼らのうち一部であるが、相当慎重な者は、一步退いて保身的になり、より多く金を儲けることを目標とし、国やコミュニティ社会とは一定の距離を保ち、あたかも自分達がいかなる具体的なコミュニティにも属さないかのように振る舞っている。他方、コミュニティは、彼らには金持ちになった能力と巨額の資産があると認める以外には、彼らが他の面で存在していることは全く認識していないかのようである。さらに一部の者は、地位にそぐわないこのような状態に甘んぜず、積極的に村落政治に身を投じるが、その多くは政治的にまだ充分には成功していない。

### 村落政治の操縦者

村落コミュニティの政治エリートには、村落政治の頂点に身を置くコミュニティの党政幹部と積極的に村落政治に参与するコミュニティのやり手が含まれる。当然、上に述べたように、村落コミュニティの党政指導の職務にはついていないが、村落コミュニティの社会や経済の発展に對し何もしていない村幹部は排除しなければならない。彼らは単

に国家権力のコミュニティ内におけるブローカーなのであるが、はつきり言つて、コミュニティの経済や社会に対するその影響力は、杜贊奇が著わした今世紀初頭五〇年の華北農村における郷村ブローカー（利潤型ブローカー）であれ、保護型ブローカーであれ）にすら及ばない。

一般的に言つて、郷村コミュニティの政治エリートはまた、コミュニティの主要な党政幹部、すなわち党支部（総支部あるいは党委員会）書記と村民委員会の主任であり、「村主任」は、村人の会話の中でしばしば「村長」と称される。他の村幹部は、基本的に随従者の立場にあり、村ではこれといつて権限を持たず、村落政治の活動に決定的な影響を及ぼすこともなく、村落の主要な幹部——政治エリート——の助手に過ぎない。従つて、以下では、村の党支部書記と村民委员会主任を中心にして、村落の政治エリートの外的特徴を考察することとする。

一四村には全部で二六名の村の主要幹部がおり（二村では村支部書記が村主任を兼任し）、そのうち女性メンバーは一名だけで、その他の二五名はみな男性メンバーである。彼らの平均年齢は四六歳とやや高く、そのうち村主任の平均年齢は四一歳、支部書記の平均年齢は四七歳で、村支部書記は村主任より六歳高く、そのうえ一般的な後継形式は現任の村支部書記が退職した後、現任の村主任が村支部書記を引き継ぐために、これらの村落で主要な幹部の平均年

齢が下がるかどうかは、その趨勢が決してはつきりしないが、外圧が及ぼす影響によつて決まる。例えば、湖南省S県は、一九九六年に、各種の措置をとつて村幹部を整理し、一年のうちに、県全体の村支部書記の平均年齢を四九・三歳から四四・六歳に下げた。このことは、中国の村落における政治的独立性が相対的なものであること、同時に、このような相対性ゆえに、村落コミュニティの政治エリート予備軍が優位に立つたためには若さそのものが重要であることを示している。学歴から見れば、この二六名の支部書記と村主任のうち、小卒は五名で一九・二%、中卒は一名で五・〇%、高卒は八名で三〇・八%である。もしも小学校六年、中学三年、高校三年で計算すれば、二六名の村幹部が教育を受けた平均年数は約九年である。農村労働者の平均的な教育程度と比べれば、村落の党政幹部の学歴は比較的高いと言ふべきであり、このことは主に高卒が占める割合に表われている。

各村の党政幹部の家族の一人当たりの純収入と彼らが所属するコミュニティの一人当たりの純収入とを比較することにより、彼らの暮らし向きがいずれもそのコミュニティで中のレベル以上であるということが分かる。九名の暮らし向きは村で中のレベルであり、六名は中の上レベルであり、残り一名は上レベルに属する。一家の資産が一千万元以上の者が少なくとも五名、十万一百万円の者も五名で

ある。このことにより、これらの村落の党政幹部は、経済資本では優位にあり、基本的に皆、郷村企業家であることがわかる。実際、この二六名のコミュニティの党政幹部の職業を、その主な収入源に基づいて、次のように農業、工業、商業、専従村幹部の四種に分類できる。(1)農業一人名、そのうちコミュニティ内で養殖富豪と公認される者は三名で、彼らの養殖業の年収は平均十万元以上である。その他八名は穀物栽培が主で、多角経営も行ない、家族の一人当たりの純年収は二千―五千元の間にある。(2)工業五名、そのうち二名は集団企業の工場長であり、三名は私営工業企業主で小さな飲食業も経営し、収入は不詳であるが、一家の資産は明らかにいずれも十万元以上である。(3)私営商業企業主三名、そのうち一名は屠畜業で、個人の年収は約一万元であり、二名は薬剤業で、個人の純年収は七・四万元、年間売上約三十万元、各種の家族資産は総計一二〇万元を超える。(4)専従の村の党政幹部七名、そのうち完全に生産業務を離れている専従幹部は二名で、一名は河北省X村の支部書記であり、個人年収は一・二万元余り、もう一名は湖南省T村の党委員会書記兼村の農工商總公司總經理であり、年収は不詳である。残り五名の職務年収は六千―一万元とまちまちで、同時に家族経営にも関わっている。

一人の人間の社会経歴は、その人的資本の源泉であると同時に、その社会資本の源泉でもある。このような経歴は

村落コミュニティの政治エリートにも同様に重要である。ある程度、一つのコミュニティの政治エリートの経歴が広汎、複雑であるほど、コミュニティの首長としての彼らの政治的な活動能力もまたより強くより成熟したものとなる。調査した一四村二六名の村支部書記と村主任の状況を見ると、彼らが支部書記あるいは村長になる以前の経歴はいずれも一般農民より複雑である。これらの経歴を大まかに「一般村組幹部経歴」、「軍隊経歴」、「集団企業幹部経歴」、「私営企業家経歴」（個体商工業者を含む）、「一般農民経歴」の五種に分類することができる。調査結果から、現任の村党支部書記と村主任の中で、「軍隊経歴」を持つ者のべ一〇名、比較的長い「一般幹部経歴」を持つ者のべ一九名、「集団企業幹部経歴」を持つ者のべ五名、過去に（あるいは現在もなお）「私営企業家経歴」を持つ者のべ九名、一般農民黨員から支部書記あるいは村長に直接選ばれた者のべ四名、であることが分かる。五種の経歴の中で前四種の経歴は合計のべ四十三名であり、四名の一般農民黨員から村の党政幹部に直接選ばれた者を除き、その他二二名が平均して各人二種近くの異なる経歴を持ち、そのうち六名は三種の異なる経歴を持つ。これらの経歴のうち、「一般村組幹部」経歴は村落の党政幹部の成長に対して恐らく最も重要な意味を持っている。と言うのもこの種の経歴は、彼らが村落の政治活動の手順と規則を熟知する最も直接的なルートであり、



さらに重要なことは、一般村組幹部として、彼らは、より多くより頻繁にコミュニティ内の他のメンバーと共に活動し、密接な相互理解を打ちたてる機会があるからである。

これは、彼らが村落コミュニティにおいて社会資本を蓄積する恰好の機会である。次いで、「集団企業幹部」と「私営企業家」（個体商工業者を含む）経歴もまた重要である。このような経歴は、村落の党政幹部が経済発展の道をより良く理解し、村落経済を管理する経験と能力をより多く持つのに助けとなる。従って、経済発展が重視され、そのうえ村落の党政幹部が村域経済により大きな変化をもたらすことが期待されるコミュニティでは、彼らが村落自治共同体の首脳に当選するチャンスが最も高い。さらに指摘しなければならぬのは、「軍隊経歴」がどうやら村落コミュニティの領袖にある種の利点をもたらしていることである。退役軍人の見識は、通常、コミュニティ内の他のメンバーよりも広く、軍における苦しい身体技能訓練と厳格な組織規律訓練も、彼らが価値ある人的資本を蓄積する助けとなり、戦友関係は彼らが蓄積する社会資本の重要なものである。

上に述べたコミュニティの党政幹部以外に、我々が調査した一四村落には、村落政治に非常に関心を寄せる一群の人々が存在し、その多くがコミュニティにおける有力な企業家、あるいはまさに数を増やしつつある経済的なやり手

であり、コミュニティの政治に多かれ少なかれ影響を与えている。彼らを非幹部政治エリートと呼んでおくが、彼らの村落政治に対する影響は、主に以下のいくつかの点に表われている。

(1) 彼らは村落政治に直接参与している。党政幹部に正面切って提案したり、支持することにより、村落政治の実際の進行過程に影響を及ぼしている。例えば、湖南省S県Z村の養殖富豪張某は、村支部書記の実兄であるのみならず、コミュニティでかなり影響力のある人物でもある。彼の家は村の事務局同然で、村支部や村委員会の会議は彼の家で開催され、上級指導者が来ると彼の家で接待する。村の大きな政策決定もまた常に彼の家で行なわれるので、彼自身は出て当り前という態度で会議に同席し、自己の成功と経験により、村の政策決定に影響を及ぼしている。彼は、村落政治上層部の実質的な顧問なのである。

(2) コミュニティの政治活動を批判、監督し、バランスを取る役割を果たしている。このような働きをするのは、往々にして、任務を離れた村支部書記や村主任である。彼らは、過去の実権者として、コミュニティの公共事務に非常に詳しく、コミュニティの政治活動の手順をも知り尽くしている。そのため、彼ら自身が在任時に成績が劣り、コミュニティ内において声望が非常に低くない限り、彼らには、現任の村落の党政幹部の仕事の優劣に判定を下し、意



見を述べ、批判をする資格がある。重要なことは、彼らが競争により、村落政治の最上層に返り咲く可能性が薄いために、その批判と意見は、ややもすれば、コミュニティの政治活動に対し、バランスを取り、間違いを正す働きしかないということである。

(3) コミュニティの政治競争に参加し、現職の村落の党政幹部の政治的地位に挑戦する。これもまた実際の政治エリートで、彼らは村落において比較的大きな経済力を持ち、そのうえその能力により、村落コミュニティの他のメンバーの注目の的となつてゐる。彼らに対するコミュニティメンバーのこのような注目は、彼らに不利に働く可能性もあり、彼らの政治資本となる可能性もある。このような競争は、潜在的であることもあり、顕在的であることもある。我々が調査した一四村において、このような競争的な村落政治は既に出現しており、さらに、村落コミュニティの自治度の高まりや村落政治の独立性の強まりに伴い、競争が激化すると予見できよう。

以上の通り政治エリートについて見てきたが、ここで、次のことが明らかにになる。農村の経済的な市場化の進行と、農民の経済的な自由度の増大に伴い、村落コミュニティには社会の分化と構造の多様化が益々つきりと現われはじめ、村民の自治度の高まりと歩調を合わせて、郷村コミュニティの政治に改革前とは異なるなんらかの変化を生じさ

せている。つまり、政治エリート自身が分化し、非幹部政治エリートが村落政治の活動過程に影響を及ぼしはじめているのである。

### 郷村の社会生活の組織者と判定者

他の領域で徐々にある程度の独立性が生じると同様に、郷村コミュニティの社会生活の領域も改革の過程で、より独立したものに変わつてゐる。郷村コミュニティにおけるこの活動領域の独立の度合いは最も高いと言っても良い。コミュニティメンバーの社会生活は事実上、既に真正正銘の自治領域となつてゐる。改革以前において、社会生活の意識形態化、政治化さらには階級闘争化により、この活動領域はほとんど消滅してゐた。しかるに、社会生活の領域の独立と自治化は、改革の必然的な結果であり、コミュニティの経済と農家の経済が益々独立し、市場化した結果なのである。

しかし、一旦コミュニティメンバーの社会生活がすべて個人あるいは家族自身のことになると、逆に、比較的まとまりのある社会生活に対する必要性、他者との関係において協調する必要性、他者との儀礼において組織的なものを加える必要性、さらに他者との行為において道徳的な判定を行なう必要性が生まれる。一言で言えば、人々に、コミュニティの社会生活に対してより秩序や等級のある手配を行

なう必要性が再び生じるのであるが、それは人間の生活は本質的に社会的なものであり、格差があつて等級がある社会生活であるためである。

このような社会生活は、コミュニティにおける他者との交流や共同活動の中で実現されるものである。人々は、相互に交流する中で互いを評価し、それを通して、コミュニティメンバーの手柄、能力、経験、知識や背景などの面における優劣や高低を判断するのである。最も広義のコミュニティの社会エリートはとりもなおさず、これらの面において人より優れ、その行動が注目される役割を演じている傑出した人物であるが、彼らも往々にしてこのような評価の過程を通じて生まれかつ認められてきたのである。

調査した一四村において、村幹部の分析と村人の叙述、さらに本人に対する面接に基づき、社会エリートと認められる者は、およそ四一名で、平均して各村約三名である。面接データに基づき、これら社会エリートの人口特徴、経済特徴、社会特徴とその活動特徴に関して以下のような情報を得られる。

この四一名の中に女性が占める比重は、極めて小さい。コミュニティの社会生活において組織的な役割を果たしていると思われる女性は二名だけである。年齢構成から言えば、四一名中、四五―四九歳九名、五〇―五四歳九名、五五―五九歳一〇名、六〇歳以上一三名（そのうち七〇歳

以上五名）である。これで分かるように、四四歳以下の若いコミュニティメンバーはコミュニティにおいて社会エリートの地位を獲得しにくいようである。学歴面では、中卒以上の学歴を持つ者は少数派に過ぎないが、その比率は同年齢の人々における相対応する比率を大幅に超えている。四一名中、高卒者は三名で七・三%、中卒者は一五名で三六・六%、小卒者は二三名で五六・一%である。中卒と高卒の二項が占める比率は四四%に達する。

全体的に見て、社会エリートの暮らし向きは、各々のコミュニティにおいていずれも比較的良好。四一名中、暮らし向きがそのコミュニティで中の下レベルにある者はわずかに四名、中レベルにある者は一四名、中の上レベルにある者は一二名、その他一一名は上レベルにある。コミュニティの過半数の社会エリートの暮らし向きは中の上レベル以上であつて、暮らし向きが劣る者は一人もないことが分かる。これらの社会エリートの現在の就業状況は、七〇%以上が依然として働いており、職を持たないのは三〇%未満しかない。仕事を持つ二九名のうち、私営企業主と称せられる者五名、個体商工業者四名、集団企業あるいは私営企業の経営者二名、その他一八名は主に農業に従事しているが、この一八名のうち、相当数の人達の子女は個体商工業者あるいは私営企業主である。

コミュニティエリートの社会特徴はまた彼らの社会資本

の特徴でもあり、彼らの政治的身分、主要な経歴や社会関係の広さを用いて描き出すことができる。政治面から見れば、党員は二〇名でほぼ半数を占め、非党員が二一名である。全国的には、党員が総人口に占める比率はおよそ五％であるが、農村部では、この比率はさらに低い。社会エリートの中では、党員の身分が一定の優勢を持っていることが分かる。主要な社会経歴から見れば、退職した国家幹部、退任した村組幹部と現任の村幹部が占める比率は相当に高い。四一名中、一般農民経歴しかない者九名、人民公社時代に生産隊長を務めた者九名、退任した村支部書記三名、在職の村幹部で同時に社会エリートとなっている者七名、退職した国家幹部五名、商工業界エリート五名、その他の経歴を持つ者三名（退職した労働者一名、退職した医者一名、郷村弁護士一名）である。村組幹部あるいは国家幹部経歴を持つ者すべてを加えると、合計二四名で、四一名中五八・五％を占める。これらの経歴があることで、彼らは、村民の社会生活の基本構造をよりよく理解できるだけでなく、社会資本を蓄積する機会をより多く持ち、コミュニティにおいて声望を獲得することもできるのである。相応して、彼らの社会関係も、通常、比較的広い。

どうやら、村落コミュニティの社会生活は依然として老人の影響を大きく受けているようである。それは費孝通が述べた「長老統治」と一種近いところがあり、違うところ

は、「長老統治」の範囲が大きく縮小し、社会組織の基礎も同じではない点である。しかし周知のとおり、このような状況は改革前には存在せず、改革後の郷村社会におけるそのわずかな復活は、一方では社会生活の領域の独立と密接に関連し、他方では以下の二つの要素とも関連する。(1)若いコミュニティメンバーは、主に、経済と政治の活動領域において自分の能力と活力を現わし、年寄りはこの二つの活動領域から部分的に退いているが、そのうち一部の人は、コミュニティの生活において影響力や地位のある人物であり続けたいがために、必然的に社会生活の領域において自分の持つ優勢な資本を顯示しなければならない。(2)年齢が比較的高いコミュニティメンバーも確かに自らの長年に渡る蓄積を通して、より多くの、社会生活を組織する経験、能力と声望を持つ。すなわち、コミュニティの社会生活の領域で才能を発揮するのに適した、優勢な人的資本と社会資本を持つのである。これと同時に、定年退職した国家幹部（彼らは明確に自らを所属コミュニティの一員と見なし（ている）と、退職したか在职中の村組幹部（及び党員）がコミュニティの社会エリート集団に占める優勢な比率は、これらの政治資本（社会資本の一種の重要な形式）が社会生活の中で象徴化されていること、つまりこの人達が社会生活の領域で大きな影響力を及ぼす資格を持つ象徴資本となつていることを示している。このような状況は、一九世

紀以前において森や泉に閑居する隠退した官吏がコミュニティに及ぼした影響を想起させる。

## 農村コミュニティエリートの権力分配

一般的に言つて、権力は人々の支配する資源の差異と資源流動の必要性に起因する。資源流動は権力の優位を招き、資源提供者の権力と受領者の依存を引き起こす<sup>(1)</sup>。当然のことながら、前述したように、資源の配置は制度化されたものであり、その内在的な構造を持つ。この点は経済と政治という二つの社会的な交換あるいは共同活動の領域においてとりわけ重要である。資源配置の制度化によつて与えられる特定の構造的地位にある人は、その擁する資源支配権が当然、他の構造的地位にある人とは異なる。このような制度化された資源支配の差異は制度化された権限の差異をもたらず。しかるに、いわゆる制度化された権限は往々にして、それ自身が重要な資源となつたり、最も有用な資源となつたりする。

ある社会の権限の配置構造が、資源配置の制度化されたものによつて決まる以上、資源配置の制度化されたものに大きな変化が生じると、権限の配置構造にもそれなりに変化が生じる。我々が農村コミュニティの、改革開放後における権限の配置の変化を調査した時、この点はとりわけはつ

きりしていた。当然我々はここで、各種コミュニティエリートの名目上の権限を分析するだけでなく、実際上の権限をも考察しなければならない。

経済エリートが擁するものは主に経済的権限と影響力である。いわゆる経済的権限は、経済資源に対する優勢な支配を指し、それは最終的に経済資本の生産、分配と交換方式に対する支配に基づいている。農村コミュニティの経済エリートは、私営企業家であれ集団企業の経営者であれ、皆、ある程度の規模を持つに至つた経済資本に対する支配により、一定の資産と収入の分配権を手に入れた。私営企業家について言えば、このような権限はまずはじめに彼らの社員採用の選択に表われる。今までのところ、私営企業家のうち多数の者は、ある種の特権主義の原則に従い、親族、友人とコミュニティ内の他の労働者を優先的に社員に採用しており、一部の者は、普遍主義の社員採用原則を堅持し、仕事ができさえすれば、その人がどのような社会関係のネットワークから来たのか気にかけない。一つ目の原則に従えば、一部のコミュニティメンバー及びさらに多数の非コミュニティメンバーは就労の機会を失うが、それは、農業以外の収入を得る機会をなくすことでもある。二つ目の原則に従えば、社員採用の基準に合わないと考えられる人々は、このような機会を失うこととなり、彼らが雇い主とどのような特殊な関係にあるかは考慮されない。しかし

このような社員採用の志向は、決して完全に企業主の持つ価値観によってのみ決まるのではなく、そこには利益計算も働いている。

河北省のX村では、私営企業家・馬氏が装丁工場を経営し、合計三十余名の労働者がおり、そのうち半数は自分の村の人間で、残りの半数は他県さらには他省の人間である。自分の村の労働者を採用する利点は、決して知合いだからでもなければ、同郷人を優遇するためでもなく、よその村の人間よりも、自分の村の人間の方が残業をさせるのに都合が良いからである。よその県や省の人間は、工場に住み込めば良いので、このようなことは問題にならない。工場では、社員一名だけが工場主の縁故者（弟）で、運送を受け持ち、年収も一万元と比較的高いが、責任も非常にはつきりしている。もう少し詳しく言えば、工場主とその弟は明確な雇用と被雇用の関係を保っており、車の運転以外に、その弟が工場内の他の事務に参画することはない。この例では、工場主・馬氏の社員採用の原則には、利益計算に基づく普遍主義志向が見られる。

この村のもう一人の私営企業家・鄒氏は金糸細工工場と豆炭加工工場を経営し、労働者計四十名余りを使っているが、その中にはよその村あるいはよその土地の者は一人もない。鄒氏は次のように公言している。自分はよその土地の人間は使わない、というのもまず第一に、この村には

いくらでも労働力があり、よその土地の人間を使うには及ばないからである、自分は今後できる限り経営規模を大きくするように努力してこの村の余剰労働力をより多く吸収したい、第二に、この村の人間を使うことはこの村の縁故を使うのであつて、今のところ自分はこの村の縁故をまだ使い切っておらず、よその土地の人間を使うわけにいかない、第三に、よその土地の人間が来たら、賃金は少し安くあがるが、寮と食事を提供せねばならず、面倒すぎる、しかし、この村の範囲内で人を採るといっても、能力次第であつて、親疎遠近は問わない。このケースでは、鄒氏の社員採用の選択権の行使原則は、特殊主義、普遍主義と利益計算が混ざったものである。

私の調査で、特殊主義とりわけコミュニティ本位主義は、依然として大多数の私営企業主の社員採用の原則であることが明らかにになった。このことは彼らのコミュニティ帰属意識と緊密に関連しているが、この原則が実行されていることには、企業業種の性質と村落コミュニティの総体的な経済の発展レベルの制約があるのである。一方、仕事がついに給料が低い業種や職種では、企業家は自分のコミュニティ内で、廉価な労働力を必要だけ確保することが難しく、総体的な経済の発展レベルが高いコミュニティではなおさらである。他方では、専門化の度合いが高いために高度な技術が要求される仕事は、そのコミュニティ内

で適当な人物が見つからないことが往々にしてある。このような二つの状況から、私営企業家は皆、コミュニティの枠を打ち破る必要に迫られている。

私営企業家の経済的権限はさらに、そこで働く労働者が、自己の余剰労働で以って自分を必要とする労働に対して企業家が支払う報酬と引き換えねばならないこと、そして企業家の指図を聞き、企業家が自身の利益のために制定したさまざまな社内の規則や制度に従うこと、さらに企業家の権威を守ること、に具体的に表われている。これは、企業家の企業組織内における権限の主たるものであり、それには搾取権、さらに管理権も含まれる。このような権限は、労働者を必要とする労働に対する報酬の支払いを前提とするために、本質的には交換的な権限であるが、換言すれば、彼の権限は、彼が資源を支配していることから来ているのであって、単なる地位的な権限なのではない。より正確に言えば、彼が支配する資源の財産権は彼自身に属するため、労働者に対する彼の権限は彼の財産権の派生物なのである。彼の権威は、労働者が自分の行動の支配権を彼に譲渡したことに由来する。このような権威は、通常、主に企業組織の内部において有効である。しかしコミュニティ本位の社員採用の原則により、彼の権威がその企業組織の範囲外にまで及ぶことすらある。例えば、労働者がもしその雇用される機会を保とうとするならば、私営企業組織の範囲外で

あっても、決して企業主の権威を損ねるようなことをするわけにはいかず、さらには自分の雇い主に対する不満をはつきり言うわけにもいかない。同じコミュニティ内にあつては、他人と共に行動することは頻繁であり、情報の伝播も容易にして迅速であるために、仮に雇い主の権威を損ねるようなことをすれば、雇い主から解雇されるという報復を受けやすい。このような報復の脅威に対する心配が大きいほど、雇い主の権威もまた大きい。

私営企業家の影響力については、企業組織の外では、主に以下のいくつかの点に表われている。一つ目は、一人の企業家の成功は、コミュニティ内では経済的なチャンスが限られているという意味で、他人のチャンスの減少を意味する。例えば、湖南省Y村では、企業家・寧氏が率先して自分の村でヘパリンナトリウム抽出工場を建て、さらに周囲の各村と安定した豚の小腸の買い付け業務関係を作り上げたが、そのために、コミュニティ内の他のメンバーが寧氏の職種に入り込む余地はほとんどないのである。彼らが財産作りのルートを開拓するには、新しいチャンスを探さねばならない。二つ目は、一人の企業家の成功は、確かにコミュニティの他のメンバーに一種の刺激となり、財産作りのチャンスを探すきっかけとなることもあることである。もしも当該企業家の成功する拠所となった条件が決して他人が入れないほど高くなければ、あるいは当該企業家が決

して自己の成功した領域において独占状態を形成していない（あるいは形成できない）ならば、コミュニティ内の他のメンバーがその企業家と同じ道を歩み、かつ成功を収めることもある。如何なる専門市場も、例えば、湖南省のある別の村の薬材市場もそうであるが、皆このようにして形成されたものである。三つ目は、もしその経営規模が十分に大きければ、企業家は村落政治の活動に影響を及ぼし、それにより企業家が政治生活面の権威者となったり、あるいは直接村落政治の権力中枢に入ったりすることすらある。

集団企業の経営者の権限は、企業組織の中にあつては、財産権が集団所有であることに制約されて、私営企業家ほど大きくはないようである。通常、社員採用面において、集団企業の経営者の選択範囲はさらに狭い。コミュニティ本位はここでは最も基本的な原則であるが、それは集団企業をコミュニティ集団が所有しているために、コミュニティ内の他のメンバーには少なくとも名目上その社員となる優先権があるからである。それどころか、集団企業のトップはコミュニティの指導者から直接指図されることもある。

コミュニティの指導者が集団企業を創設したりあるいは創設を支持したりする本当の狙いの一つは、とりもなおさず、コミュニティ内の余剰労働力をどう活かすかという問題を解決することなのである。湖南省のF村で、コミュニティの指導者は、明確に各集団企業に次のように指示している。

社員採用の際、まずコミュニティ内の貧困家庭の労働者を（一家一名を原則として）考慮し、それからコミュニティ内の他の労働者の就職問題を考慮するようにしなければならない。コミュニティ内の余剰労働力が既にすべて消化されたか、あるいは未消化の労働力に村の企業で働く意志がない場合を除き、よその村の労働力を受け入れるべきではない。集団企業の経営責任者は、通常、一般社員に対しては直接の管理権を持ちながらも、社内の他の管理職に対しては往々にして十分な支配力を欠いている。それは後者がややもすればコミュニティの指導者となんらかの關係を持つているからである。このような状況は逆に、これら工場長の一般社員に対する権限や権威の行使に影響し、その規則違反の行為に制裁を加えることができないようにさせている。このような状況を引き起こすもう一つの原因は、集団企業の社員が企業財産権の集団性について明確な意識を持っていないことである。

当然のことながら、このように多くの制約があるものの、集団企業の工場長や經理は、企業組織の中において依然として多くの権限を持つており、それには社内における社員の行動に対する支配権、収入の分配権と規則違反の制裁権等が含まれる。集団企業の工場長の権限は、財産権ではなく、企業組織構造におけるその地位に基づいている。この地位に備わった権威により、彼らには上に述べたような権



限を行使する権利があるのである。集団企業の工場長や經理はさらに業績と公正さの裏付けの下に、個人的で非公式な權威を形成し、社員の自由意志による服従を獲得できる。

企業組織外の他のコミュニティ内メンバーに対する彼らの影響力は、經驗的に私營企業家と似通ったところがあるが、違いは彼らが村落政治の中核層に入り、さらには村落の党政幹部になるチャンスがより大きいことである。湖南省のQ村では、前後三名の総支部書記は皆、その村の重要な集団企業の特殊瓷廠工場長のポストから出た者であり、前任の二名はさらに郷鎮の党政幹部に昇任している。Q村に近接するL村では、現任の村の主要な党政幹部と他の集団企業の工場長や經理はいずれも、この村初の集団企業・装卸隊の社長のポストから出ている。この村の会計は次のように言っている。装卸隊は以前、村の中核企業であり、村の中堅労働力は皆この会社で働いたことがあるので、装卸隊がきちんと管理できれば、村全体が管理できたようなものである。

村落コミュニティの政治エリートの主要な部分、すなわちコミュニティの党政幹部は、コミュニティの政治活動を操る権力を持つのみならず、村落の公共経済資源を配置する権限も持つ。それには、まず、村落コミュニティ集団を代表して各農家と土地請負契約を結んだり、契約に規定された契約条項を執行する権限、そして、コミュニティの集

団企業の人事任免権や社員採用制度決定権、利益分配権、さらに、コミュニティの公共工事（あるいは計画）の立案、実施、監督権、が含まれる。この他、彼らにはさまざまな人間関係、さらには対立に介入する権限がある。一般的に、彼らの権限はその置かれた地位に備わった法的、公的な權威に基づいている。それゆえ、コミュニティの党政幹部の地位に付随する権限は、改革前のものに比べれば、改革後の方が小さい。とりわけいわゆる再分配の権限は、そのうちの相当部分が次第に、コミュニティ内の各農家と種々の経済エリートに移管されたために、換言すれば、市場に譲渡されたために、小さくなる傾向にある。しかし、まさに一部の学者が指摘しているように、これは決して各村落の必然的な運命ではなく、実際、一部の村落では、集団的権力は強化されている。

厳密に言うなら、社会エリートは、コミュニティ内で公的な権力あるいは持続的な権限を持っていない。もしも彼らにも権限があるというのであれば、それは立場的な権限である。すなわちコミュニティの社会生活の特定の場面において、彼らは、他人の行動を支配できるいくらかの権限を一時的に持っている。例えば、儀礼活動において、彼らは往々にして組織したり指揮をする役割を果たす。河北省のX村では、いわゆる「切盛り」は村の農家の冠婚葬祭において、責任を持って、それぞれの儀礼の段取りや手伝い

に來た者の役割を割り振り、來賓とその家の關係の親疎遠近に基づいてその席次や受けるべき待遇を決める。主人の家は、これらの実務を「切盛り」の処理に任せるだけでなく、自分達が儀礼活動に使う予定の金銭や物品をも「切盛り」の采配に任せるのである。「切盛り」は主人の家から権限を授けられると同時に、主人の家が提供する経済条件で最高の儀礼活動を執り行なう責任を担うが、これには主人の家の面子がかかっているために、「切盛り」も能力が問われ、名声がかかっている。家族活動家や宗教活動家にもいくらかの立場的な権限がある。前者について言えば、重要な宗族集団活動があると、彼らは当然主宰者となる。家譜や祖廟、宗廟の修繕と集団で祖先を祭るような活動は、財産権に関わる上に、人員の分担、合作、協調とも関わるが、言わば活動の組織事項なのである。宗族活動家達が持つのはすなわち、これらの事項を組織する権限である。後者について言えば、宗教理事会は宗教献金管理、廟宇修理、信徒活動組織などの事項の責任者であり、その理事長の責任（従つて権限）はさらに大きい。

社会エリートとの二つ目の権限は恐らく言葉の権限である。彼らが、コミュニティの人間關係の協調推進者、紛争の民間仲裁者やコミュニティメンバーの行為と道徳の価値判定者であるために、彼らの言うことには影響力があり、コミュニティの他のメンバーが自分の行為を改めるよう誘導ある

いは強いことができる。しかしこのような言葉の権限もたかが知れていて、権限というよりはむしろ、社会エリートが個人の非公式な權威に基づいて生み出した影響力<sup>(16)</sup>といった方がより妥当である。彼らの処理能力や公正性、さらに彼らが政治、経済の二面において、かつてあるいは依然として持っている地位が、彼らの權威の大小を決定づける重要な要素である。この点については、前に述べた、彼らの種々の外的特徴に対する検討の中に見出すことができる。

村落コミュニティにおける各種のエリート間の権限、權威や影響力の分配は、コミュニティエリートの権力構成に明らかな分権傾向があることをはっきりと示している。このような分権傾向の形成は、当然のことながら、コミュニティの社会構造が転換し、コミュニティの社会的な共同活動の領域がこれまでより分化した結果である。しかし、このような分散した権力の間には依然としてなんらかの構造あるいは構造的な繋がりが存在する。

### 郷村コミュニティの権力構造

上で見てきたことは、現代中国の郷村コミュニティにおける異なる類型のエリート間のさまざまな権限の分配である。しかし、コミュニティエリートの権力構造を漏らさず

理解するためには、各種権力間の相互関係を明確にしなければならぬ。このような関係は、異なる権力が横断的に並列していたり、縦断的に分層していたり、和やかに折り合っていたり、相互に衝突したり、という形で現われる。

一四村を調査して分かったことは、コミュニティの権力関係ネットワークは、多様な形態を持ち画一化しにくい。基本的にはコミュニティの中に権力分化や権力中枢があるかどうかに基づいて、四つの基本的な権力構造形態、すなわち、ピラミッド型構造、宗派型構造、連合型構造と不規則型構造、に分類できる、ということである。以下、具体的にその構造形態を詳説したい。

### ピラミッド型構造

ピラミッド型権力構造が存在するコミュニティでは、一つの権力中枢があるだけで、さらにそこでは、中心となる領袖型の鉄腕人物一人だけが権力ピラミッドの頂点にあぐらをかき、権力ネットワーク全体の活動を掌握し支配している。この領袖の下では、その右腕となる助手や支持者、あるいはコミュニティ内で共同創業した仲間が中核エリート層を形成している。最下層は一般のコミュニティメンバーである。彼らはコミュニティエリートではなく、わずかな権限といくらかの基本的な権利しかない。中核エリート層から最下層までの間は、さらにいくつかの層に分けること

ができるが、層がどれだけあろうとも、基本的な特徴はいずれも、各層の人数は上から下に行くにつれて増加していることである。

このようなピラミッド型構造はどのようにして形成されるのであろうか。経験的に分かっていることは、それが村落コミュニティの経済の発展過程と密接に関わっていることである。実際、すべての権力構造類型は、村落経済の発展過程と密接に関わっている。ピラミッド型権力構造を持つ村落コミュニティはいずれも、一般に以下の三つの特徴を持つ。(1)村落経済の工業化や近代化の程度が高く、基本的には発展したコミュニティである。(2)村落経済は集団経済が絶対的な優勢を占めている。(3)村落経済の発展と集団経済の優位な形態は、一人の中心となる集団主義志向を持つコミュニティの領袖の功績とされ、この領袖がまさにコミュニティの権力ピラミッドの頂点からコミュニティ全体を支配している「鉄腕エリート」なのである。我々の調査や他の学者の研究によると、ピラミッド型社会権力構造の形成には、上に述べた三つの条件のうちどの一つも欠けてはならない。とりわけ三つ目の条件が重要であり、それはピラミッド型権力構造の根幹であると言える。林南は、上述のピラミッド型権力構造が出現したコミュニティ社会を、地方法団主義あるいは地方的市場社会主義と呼び、それに二つの基本的な特徴があると考えている。すなわち(1)巨

視的管理体制が非中央集権化した後も、地方では依然として集権が維持され、その管理と分配のシステムは集権主義的でありながら、その生産は市場指向である。(2)コミュニティ内部の協調は地方ネットワークに基づいており、その中でも家族、親族が主体で、このコネクション・ネットワークが社会的な共同活動の各方面に根を下ろしている。これは家族主義志向と言えるかもしれない。林南は、この二つの特徴の結果を、特に、次のように指摘している。「(1)指示と再分配の中心は、集団資本の蓄積、福利体系と地方のインフラが立派に整えられることを志向することがある。(2)親族関係が同時に存在することで、機会構造と報酬構造の不平等な分布が発生する」<sup>(19)</sup>。我々の調査から見て、林南は恐らく一部間違っている。実際、集団化や工業化の程度が高い農村コミュニティのすべてが決してピラミッド型権力構造を形成するわけではないのと同じように、地方法团主義もまた機会構造や報酬構造の不平等あるいは平等を招くとは限らない。キーポイントは、村落コミュニティの発展方向とコミュニティの領袖個人の特別な好みや価値志向にある。この二つの点をはっきりさせなければ、どのように予測や総括をしても問題が出て来るであろう。

我々が実地調査を行なった一四村落では、四村にピラミッド型権力構造が生まれる可能性がある。なぜならそこでは産業化のレベルが高いばかりでなく、農業の占める比率が

いずれも一〇％に満たず、集団経済の占める割合も、既に六〇％を超え、一番高いところでは九八％に達するからである。このことは、これらの村々において、コミュニティ集団組織のすべてがコミュニティの経済に対して主導権を持つことを意味している。しかし実際は、この四村中、二村のコミュニティ権力構造だけがピラミッド型であり、ここでは、集団経済がコミュニティの経済の中で絶対的な優勢を占めているため、コミュニティ集団組織も村落コミュニティの社会活動において絶対的な優勢を占めることが避けられない。他の二村は別の二種の構造に属する。

集団経済が絶対的な優位にあることは、村落コミュニティの権力構造がピラミッド形状を成す基本的な条件であり、一方、この基本的な条件は、必ず、あるコミュニティエリートの強力な後押しを受けて打ち立てられるものである。<sup>(20)</sup>ここでは、この二村の発展過程を全面的に取り上げるつもりはなく、湖南省T村のケースのみを取り上げて、発展過程とコミュニティの領袖個人の特別な好みや価値志向が、ピラミッド型権力構造の形成と特徴にどのように影響を与えるかについて説明したい。

湖南省のT村では、中心となるコミュニティエリートは呉氏で、八〇年代中頃までは某郷の郷長であった。呉氏は、その郷で工業発展にかなり功績をあげた後、一九八四年に郷長を辞し、村に帰り村支部書記を務めた。帰村後にまず

したことは、人脈を利用して資金を調達し、野菜乾燥工場を設立したことである。当時、村人達はT村ごとき貧しい村で工業などというものができのうかどうか疑いを持っており、彼はたいそう苦勞して、どうにか十数村の村人を動員して共同創業にこぎつけたが、その主体は当時の村幹部であつた。

三、四年の苦心慘愴の末、野菜乾燥工場は大きな成功を収めた。呉氏は、時期や情勢を判断し、豚の屠殺冷凍加工に転向すべきだと考えた。ちょうど人々の生活が良くなり、豚肉は益々多くの人々が日常食べる物となりつつあつたからである。一九八八年、呉氏は比較的大きい冷凍加工工場の建設を決断する。原材料の供給問題の解決に、彼は、村中の農家に養豚を呼びかけたが、もちろん、すんなりとは行かなかつた。田圃に入るのをやめたばかりの農民で養豚に戻りたい者は何人もいなかったからである。集団の事業のために、彼はまず自分の家族を野菜乾燥工場からはずし、豚の飼育に戻らせ、次いで他の村幹部にも率先して家人を養豚に戻らせるよう要請した。その後すぐ、飼料工場を興し、市場価格よりも三〇%安値で村全体に養豚飼料を供給した。こうして基礎ができると、彼は、野菜乾燥工場での蓄積を資金に、T村初の真に近代的な企業である冷凍加工の大工場を設立した。その年間生産高は二千万元を超えるものである。T村の冷凍工場の製品は、早くも九〇年代初

期には遙か欧米や東南アジアにまで輸出されるようになっていた。しかし呉氏は、食用豚を加工するよりも食用鶏を加工した方が、さらに儲けが期待できることを思い立ち、市場調査の後、冷凍工場に食用鶏の加工品目を追加することにした。彼は、やはり供給問題は自分の村で解決しようと考え、養豚業を隣村に移した。とは言え、大規模養豚に適応してまもない村人にとって、養鶏への転向は、決しておいそれとはできない。既に養豚で利益をあげていたからである。呉氏はもう一度、まず家族から強制的に業種転向させるしかなかつた。家族は仕方なく、養鶏に再度転向した。村人達は彼らの「第一夫人」<sup>ファースト・レディ</sup>が今度は養鶏を始めたのを見て、これなら間違いないと信じ、陸續として養鶏を始めたのである。

養鶏に加工の工程が加わつたことで、T村はさらに大きく一歩前進し、生産高が倍增した。呉氏はこの時、自分の事業、つまりT村の事業を、さらに前進させたいのであれば、真の工業化を目指すしかないと考えた。東南アジアと業務のやりとりをするうちに、呉氏は、タイのある化繊関係の大企業の社長と知り合いになり、彼らと合作して、T村に化繊会社を興そうと考えた。一九九一年に準備を始め、八千万元を投資し、いくたの艱難辛苦を乗り越えて、ついに一九九二年の秋に着工。一九九四年には、生産高一億元を超えるハイレベルの近代的な大工場——中タイ化繊廠が落

成し、操業を開始した。この一步のおかげで、T村の生産高や利益はまたも元の倍以上となった。

一九九〇年、T村は正式に農工商総公司を組織し、呉氏が党委員会書記兼公司總經理となり、共同創業に携わった配下の村幹部は、それぞれ副總經理や各大企業の主だった責任者となった。創業過程で成績の優秀な農民社員は、その大部分が各大企業の中間管理職に抜擢された。末端は、この村の一部の一般労働者と農民、さらにその総数が既にT村自体の労働者数を遥かに超えるよその村の出身者から成り立っている。一つの権力ピラミッドがこのようにして出来あがった。興味深いことに、この権力ピラミッドでは、親族ネットワークの機能はあまりはつきりしていない。上層には、以前の大邱荘や今の華西村で見られるような家族統治モデルは見られない。呉氏は、自分は姻戚主義を心底嫌悪している、と言う（もちろん、呉家はT村では元々非常に小さく、特に力はない）。中下権力層では、地方主義あるいはコミュニティ本位の構造特徴も既に超越されている。さらに呉氏は、T村の事業のために、今後、総公司は、どの出身かは問わずに、優秀な人材だけを採用し、村の子弟であつても高校の卒業証書がもらえなければ、総公司の各企業に入つて仕事をする資格はない、と言う。

村落コミュニティにおける権力ピラミッドの形成は、一方ではコミュニティのさまざまなエリートをついにまとめ

他方では党と政府の権力を非常に大きく伸ばしている。一つにまとめている背景には、経済的に至上の成功を収めていることがあり、従つてコミュニティの指導者の人的資本と社会資本の経済活動における優勢とこのような優勢の顕在化なのである。コミュニティの公共資本としての経済の実体は、市場志向、利益目的であるが、その力の急速な増大と蓄積は、コミュニティ内の政治企業家に広汎な、自らの構造的地位の枠を越える権限と權威の裏付けを提供した。従つてこのような蓄積と増大は、これら政治企業家の個人的利益のある所となり、経済学者達が懸念する財産権の非人格化のさまざまな劣勢は、ここでは消失してしまつたかのようであり、少なくとも一時的に、政治企業家の社会的な利益に対する追求によつて覆い隠されている。これはちょうど林南の次の指摘と同じである。「実際には、地方化された多くの経済体系において、政治活動、政治組織と幹部はすべて、明らかに経済発展を目指したり支援したりしなければならず、さもなければ支持が得られず、存続し得ないことすらある」<sup>②</sup>。このため、このようなコミュニティでは、市場化の改革は、彼らの権力を弱めなかつたばかりでなく、逆に、彼らがより独立して権力や權威を発揮する機会や空間を増大させた。改革は単に、彼らにより高い能力を要求しただけである。

## 宗派型権力構造

もしもあるコミュニティの権力構造に宗派型の特徴があれば、そのコミュニティ内には少なくとも二つの権力中枢が存在し、それぞれが異なる利益集団や分派を代表している。そして、各集団間の権力的な優位は決して明らかではないが、互いの競争により、五分五分の形勢にある。宗派型権力構造のある村落コミュニティでは、衝突は避けられない。しかるに、衝突が解決されるのは、あるいはその中のある分派や集団の力が増大し、その分、他の分派や集団の力が減退し、権力の分配で差が生じた結果、不安定なピラミッド型構造に変わるか、あるいは共同活動をする中で、どちら側にも共通する利益が次第に生まれ、利益を巡る衝突がさほど重要でなくなった結果、連合型権力構造を形成するか、である。

宗派型構造は往々にして、集団経済が相当強い村落コミュニティに存在する。と言うのは、まさに集団経済が相対的に強大であるために、各利益集団は、村落権力の要害の高地、すなわち党支部書記の座を奪取し支配することに強い興味を持ち、そういった支配を通して、集団経済の力を借り、さらにコミュニティの政治、経済の活動を支配し、自己のために社会的な利益と共に経済的な利益を生み出そうと目論むのである。当然のことながら、集団経済が決して

発達していない村落コミュニティであっても、異なる社会集団（それには宗族集団や地域的集団が含まれる）が存在すれば、宗派型権力構造を形成し、互いに支部書記の地位を争い、コミュニティの政治活動を支配しようとする。よって、宗派型権力構造における権力闘争とは、異なるエリート集団間の闘争なのである。

宗派型権力構造では、通常、競争があるために、村の党支部書記と村民委员会主任という二つの地位を、二つの比較的有力な集団で分け合い、それぞれの傑出した人物が占有する。故に、村落コミュニティのさまざまな重大事は、通常、党支部書記の「一言で決まる」のであるが、宗派型権力構造が存在するコミュニティにあつては、党支部書記はコミュニティの公共事務を処理する際、必ず村主任の同意を取り付けなければならない。さもなければ党支部書記は、自分の意図を実現し難い。湖南省のQ村は、宗派型権力構造が存在する典型的なコミュニティと見なすことができる。

Q村では、宗派型権力構造は、互いに競り合う二つの大家族によつて形成されている。一方は顧家で、もう一方は林家である。顧家は現在、村の総支部書記ポストを握り、この前任もまた顧家を代表する傑出した人物であつた。彼は、企業エリートであり、総支部書記になる前に、今日ではQ村の集団企業の中堅である特殊電瓷（エレクトロ・セ



ラミックス）廠を設立している。二代前の総支部書記が、この市の某鎮の副鎮長に昇任した後、自郷の党委員会の後押しにより、彼は、特殊電瓷廠工場から直接村の党総支部書記のポストに昇任することができた。そのうえ特殊電瓷廠工場長の座を有能で精力的な副工場長（現支部書記）に譲った後、またたくまに、さらに自郷の郷長に昇任した。

この時、村の総支部書記の地位に林家の関心が集まりはじめた。林家は、村主任代理を務める林家が村の総支部書記の後継者になることを望み、ポストを巡って争った。しかし郷長に昇任した元支部書記があくまで譲らず、さらには特殊電瓷廠が村で重要な地位にあることが理由にされて、林家の関心を集めたこの総支部書記の地位は、特殊電瓷廠工場長顧某のものとなり、村主任代理の林家は補欠選挙で村の正主任となった。

顧家と林家はどちらもQ村で最も有力な家である。顧家は特殊電瓷廠を支配している。この工場は、現任の総支部書記（兼工場長）が経営に力を注いだことにより、生産高三〇〇萬元余りの企業から同一五〇〇萬元の大企業に成長し、四百名強の社員を擁している。この総支部書記は並外れた企業家精神の持ち主である。彼は、品質管理に厳しく、社員の勤務状況に絶対的な支配権を行使する一方、社員と親密な人間関係をも保っている。毎年三萬元のボーナスの中から、いつも社員の福利改善に二萬元を使い、そのうえ

加給はずっと、一般社員の〇・三倍にもならない水準である。また、あくまで賄賂は受け取らず、一九九五年に赴任してから筆者がこの村を訪れて調査する時まで、既に千を超す「祝儀」を村の財政に上納した。そのうえ、社用車には乗らず、高額の出張手当も受け取らず、客人のもてなしには自腹を切る、という風に清廉なイメージ作りに努めている。このように振る舞うことで、彼は林家との競り合いで、相手に付け込まれる隙を決して与えなかったのである。顧家が支配するもう一つの大企業は、特殊変圧器廠である。その年間生産高は五〇〇萬元を超し、利益率四〇％以上の、Q村でも収益抜群の企業である。

林家の力も侮れない。彼らは年間生産高三〇〇萬元の輸出磁器廠（村営、請負経営）と同一五〇〇萬元の村営の輸出包装箱廠を掌握している。Q村の大部分の集団企業の工場長や経理がみな林家を支持していることは言うに及ばず、この二つの大企業の経済力を足しただけでも優に顧家を超えている。また、林家は地元のに、顧家よりもさらに強力な後ろ盾を持っている。現任の都市管理委員会書記がQ村主任と相婿である外に、他の多くの職能部門の責任者が林家と親友である。しかしながら、林家は、個人の経済的な利益を追求しすぎることに弱点がある。何名かの傑出した人物は、一般村民の家屋とは比べものにならない「御殿」に住んでいるため、多かれ少なかれ直属の上司である

郷の党委員会、政府から見放されている。このために、彼らは、競争で比較的劣勢に立たされている。

総支部書記と村主任のポストは、顧家と林家という二大家族間で分配されているが、決して両者の競争や衝突を阻止するものになっていない。それどころか、現任の総支部書記は、両家のさまざまな潜在的、顕在的競争や衝突が益々激しくなる勢いがあり、自分には手の打ちようがない、と感じている。大きな村政問題は、いつも協議が不成功に終わっている。かつて、彼はある会議で、真面目でなく清廉でもない企業の経営責任者に警告を発して見たものの、すぐさま林家グループから袋叩きにあった。彼らは、市の紀律検査部門から審査組まで引張って来て彼を「審査」させたのである。当然、顧家にも自身の直属の上司の支持があり、県の官吏よりも現に管理する方が強く、林家も急には顧家をいかんともすることができない。

### 連合型権力構造

連合型権力構造が存在するコミュニティは、権力中枢がいくつかあるコミュニティである。各権力中枢は、もとより各々の利益を持つが、連合して一つの協力関係を持つ統一体となつてこそ、各々の利益を最大にできることを認識している。連合型権力構造にあつては、コミュニティ内部の各類型のエリート間の権力の衝突は、恐らく、相互依存、

相互協力と相互妥協に取つて代わられるであろう。この他、連合が実現されているということは、実際には、各権力中枢の権力分配が全く均等というわけではなく、ある一つの中核がやや優勢を占めていることを意味している。と言うのは、コミュニティの権力そのものが各類型のエリート間で平均的に分配されたものではないからである。国家の巨視的な制度配置から見れば、村落コミュニティの党支部書記は法的な権力中枢の地位を擁している。故にどのような権力中枢の代表であれ、この地位につくことは、その中枢がコミュニティの権力システムにおいてある種の優位にあることを意味する。ただ、この種の優位は力の差が明確ではなく、さらにはどのような権力中枢が支部書記という中核的地位についたところで、比較的、妥協と話し合いの態度を取つて、他の中枢と連合せざるを得ず、他の中枢もまたこのような構造に対して異議を称えない。それは彼らが自力に頼るだけでは上述のような中枢とその地位を争うのが難しいためである。湖南省L市のY村はこのような権力構造の典型的なケースである。

村の集団経済の発展が、多数のコミュニティ住民が共に努力した賜物であるために、その功績を主に、コミュニティの如何なる特定のやり手にも帰するわけにはいかない。そのため、一人の鉄腕型の中核エリートを形成することもない。社会構造の転換とエリートの分化に伴い、この村で

ははつきりと三つのエリート集団が形成され、それぞれ次のような人々を代表している。村の集団企業の工場長と經理——その中核は村の党支部書記、村の個体商工業者と私営企業主——その中核は一九九六年末に村営企業である輸出磁器廠工場長を務めた企業家、村の一般農家と栽培養殖專業農家——その中核は現任の村主任である養羊富豪戸主。

一つ目のエリート集団がやや優勢である。この優勢は、その中心的人物が村支部書記の地位にあることに集中的に表われており、さらに、彼らが輸出磁器廠以外の六つの村営企業（その生産高は村の集団企業の生産高の半分弱を占める）を支配していることにも表われている。これらの企業の責任者はすべて、村の支部書記から直接任命されたもので、ほとんどが長年在職している。支部書記は、彼らの代表として、また村全体の党の指導者として、その地位に付属する基本的な権限を擁している。同時に彼は、自身の人的資本と社会資本の優位により、上級党委員会、政府の覚えめでたく、既に自己の「政績」に対する褒美に、「国家幹部」と見なされている。しかし、この集団は、村営企業六社の工場長にはわずかな人的資本しかないことや、開拓精神に欠け、清廉で公のために尽くすこともできないことに弱点がある。結果として、いくつかの企業で景気が悪く、損失ばかりで利益が出ないため、村落コミュニティメンバーには評判が良くない。支部書記は、権威の蓄積と権限の行

使が制約され、他の集団に頼ってコミュニティの経済の成長を維持する有様である。

二つ目の集団は、村落の政治権力構造において特に一定の地位を占めていないため、明らかに政治面で力が弱い。しかしこの集団は、個体私営経済を基盤としており、この面での力は、村全体の非農業総生産高のほぼ三分の一である。その代表者謝某もまた元々は私営企業主で、食品加工、建材製造を営み、個体運輸の経験もある。百万元の資産を蓄えた、個体私営経済経営者が敬服する若きやり手である。彼の背後には、郷鎮企業家であり、Y村が所在するJ鎮の中外合資企業・華聯輸出磁器廠の中方經理を務める謝某の実兄が控えている。一九九六年、Y村きつての大会社である輸出磁器廠（生産高は、全村営企業の半分強）は、前工場長の拙劣な経営と潜在的な経済問題により、赤字を出し、倒産の可能性が極めて高くなった。村はやむなく、有能な人物を招いて工場の再建をはかることにした。謝某が自薦したところ、工場長に招聘された。彼は条件を付けた。それは、彼の経営管理に干渉しないこと、磁器廠経営陣の改組を許すこと、というものであった。謝某は就任後、改革の大鉈を振るい、旧管理職をほとんど全員整理した。整理された者がほとんど全員、村の支部書記とその助手につながる人々であったということは、注目に値する。整理後の空席には謝某と志を同じくする私営企業家がおさまった

め、村営最大のこの工場において、村支部書記の権限は、実際には既に骨抜きにされている。この企業は、華聯輸出磁器廠の支援も得て、整理を行ない、三か月もすると、利益を出し、業務が忙しくなりはじめた。それにつれて謝某の評判も高まり、今や村支部書記に勝るとも劣らない。しかし謝某は、自分はY村で一つ事業がしたいが、それにはこの輸出磁器廠の力を借りねばならず、そのうえそれをきちんと経営しなければならぬ、だから村支部書記の権限を軽率に犯すようなことをするわけにはいかない、と言う。

三つ目の集団は、経済力が前の二集団には及ばないが、コミュニティ内に広汎な社会的基盤を擁している。この集団の代表姚某は、以前、村の党支部書記を務めたことがあり、その人となりは誠実、地道で、かつ交際が広い。彼には養殖富豪の身分、能力と経験があり、金持ちになる新たな道を、村の一般農家に指し示したことで優位に立っている。彼が率先して手本を示した結果、村全体で少なくとも既に一名の養殖富豪が出現した。集団経済を持つ多くの村では、村主任の地位と職責分担は、本来いづれも農業を主とするものであり、Y村も例外ではない。故に姚某は、当然の結果として、数多くの養殖農家や栽培農家の代表となった。そして、Y村の支部書記もまた、姚某の力を借りて、村の農業生産の発展を促進しなければならなくなっている。

今のところ目に見える限りでは、Y村のこの三集団間にはまだ競争によって引き起こされる衝突は発生していない。三者は互いに依存しあい、かつ最大限、互いを支援することとで、各自の経済的な利益と社会的な利益が最大になるように努めている。このような連合型権力構造が安定しているかどうかは、各集団の力の消長や変化によって決まる。そして変化の方向として、宗派型さらにはピラミッド型権力構造に向かう可能性を排除できない。

### 不規則型権力構造

これは剰余概念であり、前に述べた三つの構造類型に収まらないコミュニティ権力構造類型が含まれる。例えば、まず、権力が高度に分散した結果、中心のない権力分布形態、そして、主要な権力中枢の他に、いくつかの中枢あるいは十分に有力な単独の権力保有者（例えば私営企業主）が存在するもの（これらの亜中心あるいは単独の権力保有者は、その中枢から遊離したり、その中枢に挑戦したりする）、あるいはさらに、経済発展レベルが低くコミュニティの分化の度合いが低いために、コミュニティ権力が未分化状態にあるもの（このような状態では、村落コミュニティの党政幹部は、国家権力のコミュニティにおける数少ないブローカーとなり、その権限は、改革前と比べて、既に農家生産請負責任制の推進により大きく削がれており、実際

には既に窓際的な地位にある)、等々などがある。

権力が高度に分散したために、権力中枢が存在しないコミュニティ権力構造は、一般に個体私営経済が高度に発達し、集団経済が抜け殻にも等しいようなコミュニティに存在する。湖南省S県のL村はこのような構造の典型と見なすことができ、また温州の大多數の農村コミュニティも恐らくこのような構造形態である。一つの主たる権力中枢があると同時に、いくつかの准中心あるいは単独の権力保有者が存在する権力構造の形態は、主として、一定の集団経済が存在するものの、まだ個体私営経済を圧倒する程には強くなっていないコミュニティに存在する。我々が調査した一四村では、五村の権力構造形態がこのような類型に属している。最後に、大多數の未分化コミュニティの権力構造は、すべて三つの類型に属する。これらのコミュニティでは、国家権力のコミュニティにおける数少ないブローカーである党政幹部以外には、注目に値するエリートは存在しない。よしんば影響力のある社会エリートであろうと出現することは困難である。なぜなら、経済的に成功していることが、既に個人の能力を評価する最も重要な基準となった時代にあつては、正直な貧乏人がコミュニティ内で他人に発言力を持つことはほとんどないからであるが、それは、金があつても公正でない人物が他人に対してこのような力を持ちにくいことと同じである。しかし、不規則なコミュニティ

ニティ権力構造形態には、依然として発展変化の可能性があり、その方向は、変化の過程そのものの特徴によって決まる。それには、こういった変化に対して外部からの干渉がないという条件が付くのではあるが。

## 注

〈1〉 例えば、Oi, Jean C., *State and Peasant in Contemporary China: The Political Economy of Village Government*. Berkeley, California: University of California Press, 1989.

〈2〉 例えば、Nee, Victor, "The Emergence of a Market Society: Changing Mechanisms of Stratification in China." *American Journal of Sociology*, Vol. 101, No. 4, January 1996; "Social Inequalities in Reforming State Socialism: Between Redistribution and Markets in China." *American Sociological Review*, 56, 1991; 王思斌「村幹部的辺際地位与行為分析」『社会学研究』一九九一年第四期。

〈3〉 Oi, Jean C., "The Fate of the Collective after the Commune," in *Chinese Society on the Eve of Tiananmen: The Impact of Reform*, edited by Deborah Davis and Ezra F. Vogel. Published by the Council on East Asian Studies/Harvard University, 1990.

〈4〉 White, Tyrene, "Political Reform and Rural Government," in *Chinese Society on the Eve of Tiananmen: The Impact of Reform*.

〈5〉 李守経・邱馨主編『中国農村基層社会組織体系研究』中国農業出版社、一九九四年、一二七頁。

(6) Oberschall, Anthony, "The Great Transition: China, Hungary, and Sociology Exit Socialism into the Market," *American Journal of Sociology*, Vol. 101, No. 4, January 1996.

(7) 陸学芸主編『改革中の農村と農民——対大寨、劉庄、華西等一三個村庄の実証研究』中共中央党校出版社、一九九二年、李培林主編『中国新时期階級階層報告』遼寧人民出版社、一九九五年を参照されたい。

(8) 王漢生「改革以来中国農村的工業化与農村精英構成的变化」『中国社会科学輯刊』（香港）、一九九四年秋季卷を参照されたい。

(9) 陳光金「家族、噬不断的脐帶？」『芙蓉』一九九四年第四期、『中国鄉村現代化的回顧与前瞻』湖南出版社、一九九六年を参照されたい。

(10) 林南「地方性市場社會主義：中国農村地方法团主義之實際運行」『国外社會學』一九九六年第五—六期を見られたい。

(11) 孫立平「国外社會學界關於市場化轉型和收入分配研究的新進展」李培林主編『中国新时期階級階層報告』所収、遼寧人民出版社、一九九五年を参照されたい。

(12) 杜贊奇「文化、權力与国家——一九〇〇—一九四二年の華北農村」江蘇人民出版社、一九九四年を参照されたい。

(13) 倫斯基・G「權力与特權：社会分層的理論」浙江人民出版社、一九八八年、Parsons, Talcott, *Politics and Social Structure*, New York, the Free Press, 1969; Parsons, Talcott, *The System of Modern Societies*, Englewood Cliffs, N. J., Prentice-

Hall, Inc., 1971 を参照されたい。

(14) 李培林・王春光『新社会結構的生長点——鄉鎮企業社会交換論』山東人民出版社、一九九三年を参照されたい。

(15) このため、河北省の某村では、一人の若者がはばかりに言っていた。「給料をくれる人には、喜びそうなことを言っただけならぬ」。

(16) 權力と影響力の連繫と分類に関しては、Parsons, Talcott, *Politics and Social Structure* を参照されたい。

(17) 王穎『新集体主義——鄉村社会的再組織』經濟管理出版社、一九九六年を参照されたい。

(18) 陸学芸主編、前掲書、王漢生、前掲論文を参照されたい。

(19) 林南、前掲論文。

(20) 林南、前掲論文を参照されたい。

(21) 林南、前掲論文。

(邦訳 黄當時)